

翻訳家が語る、 魅力ある中国文学の世界

翻訳家 泉

京鹿



それから文芸翻訳という仕事について、その現状について紹介させていただきたいと思います。

昨年9月に『紫禁城の月』が共訳で、さらに11月には『炸裂志』の翻訳が刊行されました。翻訳者の仕事は翻訳したら終わり、ではなく、作品を一人でも多くの方に知っていただき、読んでもらうために、出来る限りのことをしたいと思っています。毎日膨大な数の新刊書籍が書店に並びます。翻訳者として、自分が翻訳した作品がどれだけ素晴らしい本かと自信を持っていたところで、ほんとうにたくさん本のの中で、一冊の本の存在を知ってもらい、手に取って読んでもらうことは簡単なことではないと思います。今日はもう少し、訳書の紹介といいますが、宣伝の一環のつもりで参上しました。

これまで、共訳もあわせて十数冊の中国文学作品を日本語に翻訳してきました。

その多くが、中国では百万部を超えるベストセラー、ロングロングセラーです。残念ながら日本語訳のほうは、人口比は別にしてもベストセラーというほど売れたものはありません。それでも、いずれの作品も少なからぬ日本の読者に読んでいただき、新聞、雑誌などの書評のほか、ネット上で多くの好評をいただけてきました。日本で漫画化、舞台化された作品もあります。

今日の世界において、政治的にも経済的にもますますその存在感を高めている中国ですが、日本語で読める現代中国文学作品は充実しているとはいえず、わたしのようにこの仕事をメインにしている翻訳者も、英語やフランス語などほかの言語に比べればまだまだそう多くはないようです。まずは、わたしの自己紹介、

「泉 京鹿」という名前ですが、結婚前までの本名で、40年近く使ってきた本名ですが、取材を受けた際などに、「どうしてこんなふざけたペンネームをつけたのですか」「泉鏡花のパロディみたいなペンネームですよ」といわれたこともあります。今は、ほんとうにペンネームになっています。

東京で生まれ、神奈川県で育ちました。大学に入学するまで一切、中国とはこれといった縁もなく、大学も中国とはさらに縁のなさそうな、チャペルのあるプロテスタントの女子大学に進学しました。それが、第2外国語で選択した中国語に、

というよりは夏休みの短期留学で訪れた北京の虜になり、大学卒業後そのまま北京に留学、就職しました。それから出産を機に帰国するまで約16年間暮らしていました。実は16年のうち、留学、就労ビザを持って働いていたのは約半分の8年間だけで、残りは限りなくグレーなビザで滞在でした。所属先のないフリーランスだったからです。広告代理店から始まって、主にメディア関係でいろいろな仕事をしてきましたが、最終的に落ち着いたのが、2003年に第1作刊行となった文芸翻訳です。2002年に始めました。

わたしをこの世界に導いてくれたのは、日本在住の中国人作家で神戸国際大学の毛丹青教授です。「翻訳をやってみませんか」と声をかけてもらった際、「第2外国語で始めた中国語で専門的な勉強はしていいので、自信はありませんが興味はあります」というと、毛さんは「母国語の力と情熱があれば大丈夫」とわたしの背中を押してくれました。最初はとにかくわからないことだらけなので、毛さんを始め、信頼できる人、周りの人あれこれとんでも聞きました。今でもわからないことがあれば遠慮なく人に聞きます。通訳と違って、翻訳は時間さえあれば、ずうずうしく、人にもツールに

も頼ることができません。確かにここまでわたしがやってこられたのは「日本語」と「情熱」の勢いのおかげです。

文芸翻訳という言葉を使いましたが、要するに小説の翻訳です。ノンフィクションや、歴史小説もやります。基本的には今生きている作家、直接面識がある作家の作品です。さらに言えば、中国で売れている、ベストセラーがメインです。売れているにはそれなりの理由があり、同じ時代を生きる中国人の多くが読んでいるものを、わたしたち日本人が読むことで何か得るものがきつとあるはず、と信じているからです。それから、原書を読んで、素直に面白くて、「中国語の読めない日本人にも読んでもらいたい」という気持ちもあります。

いわゆる技術翻訳、商業翻訳とどう違うかという点、それはまず訳者の自由度にあるのではないでしょうか。法律や仕様書などの翻訳であつたら、対応する言葉がきちんと決まっているべきで、あいまいなものであつてはならないでしょう。小説の場合、そうとは言い切れないのではないのでしょうか。もちろん、きちんと対応する言葉はそれぞれにあるはずですが、翻訳者が十人いたら十通りの訳があつ

ていいと思います。

「翻訳の自由度」でいえば、たとえば、まず人称名詞です。中国の小説では老若男女、性格を問わず、一人称は「我」を使うことがほとんどです。「俺」「老子」などが出てくることもあります。多くはありません。それを日本語にする場合、特に活字にする場合には、その選択肢は豊富です。「私」「わたし」「ワタシ」「あたし」「アタシ」「わたくし」「ワタクシ」「わし」「ワシ」「うち」「ウチ」「俺」「おれ」「オレ」「僕」「ぼく」「ボク」「吾輩」……何を使うか、さらには漢字かひらがなカタカナかによって、性別、年齢、そして性格のイメージがわきます。もちろん、人によって抱くイメージは異なるでしょう。しかし、書き手にとってはその人物の性格や役割において、この一人称にはそれなりの理由があつて、人物によって使い分けられるものです。あるいは、男性的な一人称を使う女性や、老人を思わせる言葉遣いの子どもなど、いわゆる性別や年齢のイメージを裏切るために、あえて使われる場合には、その一人称はさらに重要な意味を持つてくることもあるでしょう。中国語ではほぼ全員、主語が「我」なので、登場人物の唐突なセリフで、それはいったい誰が発したも

のなのか、一瞬混乱する場面もあります。

前後をよく読めばわかるのですが、その部分だけを切り取ったら混乱する可能性は高いです。「我」をすべて「わたし」のままにするのか、あるいは「わたし」「僕」「私」「オレ」などを使い分けるのか、著者のため、作品のため、読者のため……どちらが望ましいのかは、著者によって、作品によって、読者によって、それぞれ異なると思われ、わたしの中でも明確な答えはありません。ただ、原書を読んでいると、自然に脳内変換されて、登場人物のそれぞれが主張する一人称の日本語が頭に浮かびます。そうすると、翻訳するにあたって、者のひとりにすぎない自分の中で聞こえてくる登場人物の声に従わざるをえなくなります。500ページ、1000ページに及ぶような長編小説になると、最初の方と最後では、人物のイメージが変わってきて、一人称にもずれが生じることがあります。そういう場合は、何回も読み直して、声に出してみたりして、イメージが固まるのを待ちます。声に出して読んだり、中国人の友人、あるいは著者本人に、自分の抱いたイメージを説明して、「わたしはこういう印象をもったがキャラクターのイメージは間違っていないか」と確認し

たりもします。

一人称では日本語のほうが豊富ですが、親族の呼称に関しては、中国の方が豊富なものもあります。たとえば日本語で「おばさん」と書いてあったら、中国人が中国語に翻訳する際、「このひとは主人公とどういう関係なのか」「他人でなく親族である場合、母方なのか」「父方なのか」「父よりも年上なのか、年下なのか」「自分の親の実際の兄弟なのか、その配偶者なのか」……と確認しなければなりません。それぞれに呼称があるので、知らないと言えないわけです。中国語では呼称だけで瞬間的にその関係性がわかります。日本語でわかるように訳すと説明くさくなってしまう。

また「我愛你」を日本語に訳すとしたら、語学の試験であれば「わたしはあなたを愛しています」で正解かもしれませんが、小説の翻訳ではそういうわけにはいきません。「愛してる」「アイシテル」「大好き」「きみだけだ」「会いたかった」「別れたくない」……場面によってはいずれもあり得るのではないのでしょうか。

あるいは「不要哭」は、「泣くな」「泣かないで」「大丈夫」「うるさい」「黙れ」……こんなふうに訳した方がふさわしい場面もあると思います。主語は省いたほ

うが自然な場合も多いです。

あくまでもわたし個人の印象ではありますが、日本語に比べると、一般的に敬語も多くはなく、男女の話し言葉に日本語ほどの厳密な区別がない中国語では、登場人物のキャラクターのイメージを浮かび上がらせる表現の自由があるのも、文芸翻訳の楽しみの一つです。

一人称に限ったことではありませんが、たったひとつの言葉、一行にふさわしい訳語をみつけるために、数時間、ひいては一日中机に向かっていても1ページも進まない日もあります。ものすごく非効率だとは思いますが、どれだけ時間がかかってても、思いがけずぴったりくる言葉を見つけられたときには、とても幸せな気持ちになります。言葉とまっすぐに向き合う贅沢な時間です。

気持ち的には大変贅沢な文芸翻訳ではありますが、経済的には贅沢とは無縁です。

文芸翻訳とは、「時間がかって経済効率の悪い、稼げない、好きでたまらない人にしかできない仕事」です。

正直なところ、自分の生活費すらまかなえないような収入なので、独身時代は親に、今は夫に経済的に世話になりっぱなしです。時間をかけて一生懸命仕事を

すればするほどお金がなくなっていくので、「仕事とはいえない」という声もあります。この仕事を続けられるよう、経費を稼ぐため、勉強のため、ほかにもさまざまな仕事もしています。文芸翻訳は長時間労働で、時給に直したら、おそらく驚くべき低賃金であることは間違いない、ブラックな職業ですが、もちろんわたしは好きで続けています。

文芸翻訳ならではの喜びがあります。まず、「誰よりもディープな読者になる」という贅沢を味わえます。前述のように絶対的な翻訳はありませんから、自由があります。そして、何といっても、日本でまだ知られていない作品や作家を発掘する楽しみ、喜びは何にも代えがたいものです。また、翻訳者というのは著者から大事にされます。中国では誰もが知っている、あるいは世界的にも著名な作家でも、家族ぐるみでお互いの家を行き来したり、一緒に旅行をしたり、親しいいきあひが続きます。何時間も語り合い、作家の考えているさまざまなことを直接聞かせてもらえます。これも、大変な贅沢ではないでしょうか。

そして、これは翻訳者の誰もがやっているわけではないかもしれませんが、わ

たしとしては、「最初（版權契約）から最後（プロモーション、読者との交流など）まで」関われるところにも大変なやりがいを感じています。それに伴う経費の出費もかさみますが、さらに収入につながる場合もあります。以前広告代理店で働いていた経験や、メディアコーディネーターをしていたときの経験も生きていると思います。こういう作業も好きです。翻訳は孤独な「静」の作業と、人と顔を合わせて話をするのが中心になる、本が出たあとの「動」の作業の両方がある。自己満足の世界かもしれません。

「増刷を重ねて、印税生活！」という夢も見られますが、宝くじ並みに確率の低い夢ですが。では、次のデータをご覧ください。

日本では読まれている中国の本と、中国で読まれている日本の本とを比較した

輸入と輸出の不均衡・中国における書籍版權輸出入状況

	中国における版權輸入（中国語への翻訳）		中国における版權輸出（中国語からの翻訳）	
	日本→中国	韓国→中国	中国→日本	中国→韓国
2006年	484	315	118	363
2007年	882	416	73	334
2008年	1134	755	56	303
2009年	1261	799	101	253
2010年	1766	1027	214	360
2011年	1982	1047	187	507
2012年	2006	1209	401	282
2013年	1852	1472	292	656
2014年	1736	1160	346	623

「中国伝媒体監皮書」より

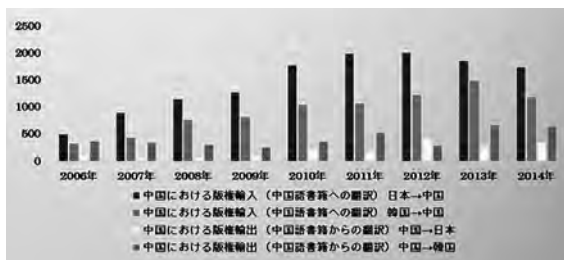
データです。

この統計に実際に流通している書籍のすべてが反映されているとは思えないので、数字としてはあまり役には立ちませんが、実感として、この比率はほぼ正しいのではないかと思っています。ここに

に韓国の数字も入れたのは、日本の数字が中国の10分の1であるという事実を、人口比率のせいにしたくないからです。

中国で日本語からの翻訳がいかに読まれているかがわかります。それに対し、日本で読める中国語からの翻訳の少なさは顕著です。「中国は人口が日本の10倍以上なのだからこれくらいの差は当たり前ではないか」と思う方もいるかもしれませんが。しかし、韓国と比較するとよくわかります。同じ比較を韓国と中国で見ると、日中間ほどの大きな差はあり

中国における書籍版權輸出入状況
（対日本及び韓国）



ません。韓国の人口は日本よりも少ないですが、韓国で読める中国語からの翻訳は日本よりずっと多く、中国で読める韓国語からの翻訳よりも多くなっています。翻訳者もたくさんいるでしょう。一方、中国の書店には日本語からの翻訳がいかにたくさん並んでいるかということがよくわかります。

2015年に撮影した写真です。写っている書籍はすべて日本語から翻訳されたものです。

2016年にはさらに平積み面積が拡大していました。

日本関連書籍を眺めたり、手に取ったりしている中国人に、「どうしてその日本の小説を読もうと思ったのですか」「日本語はできますか？」などと話しかけると、「友だちに勧められて」「映画の原作だから」「日本語はできない」という答

北京市内の書店「PAGE ONE」の日本関連書籍コーナー



えがかえってきます。特別に日本に興味があるというわけでもなく、なんとなく手にとれる選択肢に日本文学が、日本関連書籍があるというのは嬉しいことです。

もともと今回の講演は、『紫禁城の月』『大清相国』について話を」とお声をかけていただいたのですが、恥ずかしながら歴史があまり得意ではなく、歴史的な話など語ったらただポロが出るかわかりません。歴史的な考証については、担当編集者と共訳者に任せきりでした。長年の親友である北京在住の共訳者・東紫苑さんは、とにかく歴史が好きで、ほぼ独学で中国の歴史を、さまざまな原書をあたってマニアックに研究しています。主人公である陳廷敬の山西省にある生家を訪れたときのことや、小説の中では詳しくは述べられていなかった実際の歴史のエピソードなどについても書かれていますので、ブログ『いちんたん 北京ときどき歴史随筆 翻訳者・東紫苑（あずましおん）のブログ』<http://blog.goo.ne.jp/yichintang> をご覧いただければ幸いです。

この本の著者について、またこの本がベストセラーになった作品をめぐる背景

について、『朝日新聞GLOBE』の連載で紹介したことがあります。その記事を読んで、情熱的な女性編集者がわたしの講演を聞きに来てくれて、翻訳企画を進めてくれました。原書で読んで、訳したいという気持ちはあったものの、歴史ものにまったく自信がなかったので、友人に声をかけ、共訳という形で進めることになりました。けれど最終的にこの作品の翻訳が完成したのは、この東紫苑さん、そして大変に優秀な担当編集者の森山文恵さんという2人の女性の力です。わたしの貢献など共訳者として名前を入れてもらうのを遠慮したい微々たるものでした。ただ、この作品の著者である王躍文の作品を原書で読んだのは、わたしは日本人の中ではかなり早い方だったかもしれません。日本での翻訳、刊行に結びつく記事を書いたことにはそれなりの貢献はあるかもしれません。中国が建国60周年を迎えた2009年10月に朝日新聞GLOBEで、『朱鎔基答記者問』とともに『黄蒼』を紹介したのが王躍文の作品を紹介した最初でした。

……（前半省略）……いかに厳しく取り締まろうと、汚職・腐敗を根絶するのは不可能に近い。朱鎔基時代然り。

『蒼黄』は「官界小説」の第一人者といわれる王躍文の最新作。外国人には把握しにくい中国の地方政府の役人の肩書や地位、微妙な上下関係、権力範囲がわかる小説だ。タイトルは、エピソードに引かれて「蒼に染むれば則ち蒼となり、黄に染むれば則ち黄となる。ゆえに入る者変ずれば、其の色も亦た変ず」（『墨子・所染』）に由来する。……（中略）……政治の世界で清廉潔白であることは、かくも生きにくいものなのか。著者の身辺も穏やかではない。湖南省政府、懷化市政府の職員だった過去の経歴から、登場人物のモデルや実際の事件との関連があれこれと取りざたされる。版權契約でもめた別の出版社が、修正前のゲラ段階の本作品を『落木無辺』（上下）としてすでに上巻を刊行。著者は下巻の発売停止と100万元（約1300万円）の損害賠償を求めて訴えを起こした。海賊版も後を絶たない。官界のみならず、出版界の闇もまだまだ深い。

（2009年10月5日『朝日新聞GLOBE』）

『紫禁城の月』の原作である『大清相国』を紹介したのは2014年3月6

日の同じく『朝日新聞GLOBE』の世界の書店から」でした。

今からちょうど2年前（2012年）、3月半ばの全国人民代表大会（全人代）閉幕後に、中国の政界を大きく揺さぶる解任劇が明るみに出た。当時の重慶市トップで最高指導部入りも目されていた薄熙來の失脚である。それ以上の大捕物として今注目されているのが、前政治局常務委員の周永康だ。元秘書ら関係者が次々に拘束され、2月末現在、本人は汚職容疑で軟禁状態にあるという。そんな中央政府高官の汚職を容赦なく取り締まる中央規律検査委員会のトップが王岐山。昨年この欄で「アレクシス・ド・トクヴィルの『旧体制と大革命』を人々に薦めている」と触れたように、本当に読書家で、しかも読んだ本を人に薦めずにはいられない性分らしい。

歴史小説『大清相国』も王の愛読書であり、部下らに薦めていることが雑誌で紹介され、話題を呼んだ。物語は、清の順治年間に科挙に合格し、次の康熙帝に約50年仕えた陳廷敬の生涯をたどる。6部門のうち4つの尚書（長官）を歴任し、権力闘争や腐敗に屈せず、

愚直なまでに清廉に公正に、皇帝に忠義を尽くし、庶民の気持ちも理解した「理想の官僚」として描かれる。

科挙の最終試験に優秀な成績で合格しながら、役人に賄賂を贈ることもせず、身内や友人の不正にも目をつぶれない真面目な性格ゆえ、次々にトラブルに巻き込まれる。朝廷に仕えてからは。率直な進言も恐れなかったために皇帝の怒りを買ひ、幾度となく絶体絶命の危機に。それでも欲望渦巻く伏魔殿を生き抜いたのは、その才能と人柄にひかれた人々に助けられ、皇帝自身もその才能と忠義、愚直さを認め。信頼したことにある。

……（中略）……

著者の王躍文は元公務員で、「官界小説」の名手。いつの時代にもはびこる役人の汚職、力の複雑な渦の中でもがき苦しむ主人公たちの姿に、読者は現実社会の絶望と希望を見るのだろう。

汚職取り締まりに大ナタを振るう王岐山が公務員に本書を薦めるのは、陳廷敬に倣えというメッセージか。あるいは同じ山西省に出自を持ち、最後まで政界を生き抜いた「不倒翁」、陳廷敬に自身を重ねているのか。

（2014年3月6日『朝日新聞GLOBE』）

〇 B E

この文中で触れた中国共産党中央の人事はこの数年で大きく動き、薄熙来に続いて結局は周永康も失脚しています。浮き沈みの激しい中国の官界の頂点、中国共産党中央で、王岐山は江沢民主席時代の朱鎔基首相に手腕を認められ、胡錦濤、習近平とトップが代わっても習近平政権の汚職撲滅の、ひいては習近平政権そのもののキーパーソンでありつづけているようです。その王岐山の愛読書であり、部下に、公務員に読ませたいという本書には、時代は変わっても、清廉であることの大切さ、中国の官界の闇、そしてその闇にのまれることなくいかに生き抜くかというヒントに満ちています。実際、数百年を経て、王朝も制度も異なるというのに、中華人民共和国の官界でいま起こっていることはあまり変わらないようです。

中国人は時代小説やSF小説の中にも、自分たちの生きる時代や現政権への批判、メッセージを読み取ります。それが著者の意図したところなのかどうかは別にして、小説であれ、ノンフィクションであれ、少なくともあからさまな、ストレートな政治批判は許されない現状では、書き手と読み手の間にそういう前提や呼吸

のようなものが必要なのでしょう。

ちなみにSFでは、2015年に劉慈欣『三体』が長編小説部門で、2016年に郝景芳『北京折疊』で、2年連続で中国人作家の作品がヒューゴー賞を受賞しています。いずれも英語版の訳者は邦訳『紙の動物園』などで日本でも知られる作家ケン・リュウです。こうして世界に認められた中国のSF小説には、今後も期待したいところです。

閻連科の名前が世界的に広く知られるようになったのは、2014年に村上春樹に次いでアジアでは2人目、中国では初のカファ賞受賞作家となったことが大きいでしょう。近年、ノーベル文学賞候補としても取り沙汰されることが多く、イギリスのブック・アワードにも2度上がっています。(2017年4月時点・2017年『炸裂志』で3度目の候補に)

閻連科については、『炸裂志』の記者あとがきを読んでいただけで幸いです。作家の経歴や作品の紹介もしていますが、わたしと閻連科の出会いから現在にいたるまで、どうしてわたしに『炸裂志』を翻訳することになったのかということ、閻連科の日本とのかかわりを、この10年ほどを振り返って書きました。

作家に限らず、中国で著名人が政治や社会に対して批判的な発言をするのは、容易なことではありません。多くの人が言葉を濁し、口をつぐんでいます。そんな中で閻連科は齒に衣着せぬ発言で、常に物議を醸してきました。中国において間違っていることを「間違っている」というだけで、時として大変な反応を引き起こします。中でも日中関係において日本側の事情も汲み取り、中国人の行動を批判するような発言は、集中砲火を浴びること必至のタブーですが、閻連科はそこでもためらうことはありませんでした。

村上春樹が2012年9月に『朝日新聞』に寄せた東アジアの領土問題をめぐるエッセーへの返信として『AERA』2012年10月15日号に寄稿した「ひとつの文学が冷遇されるとき、国の面積など何の意味があるのか」では、尖閣諸島問題で悪化した日中関係を憂い、文学や民間交流までもが巻き込まれる領土権争いを批判し、「文化と文学は人類存在のもっとも深い部分の根であり、中でも、中日両国及び東アジアの人々が互いに愛しあうための重要な血管なのである」とびかけています。閻連科作品は『人民に奉仕する』(谷川毅・訳)『丁庄の夢』

（谷川毅・訳）、『四書』（2017年刊行予定？）はそれぞれ原書が発禁あるいは再販禁止となっています。『炸裂志』は刊行されましたが、メディアでの書評や宣伝は禁じられたそうです。日本では昨年2016年に、邦訳『父を想う』（飯塚容・訳）『年月日』（谷川毅・訳）『炸裂志』の3冊が刊行され、2度の来日を果たしています。そのときの様子は『東方』『すばる』『中央公論』『AERA』『早稲田文学』『北海道新聞』などにインタビュー記事などが掲載されています。昨年の滞在で閨連科はさらに日本びいきになったようです。「できることなら毎年でも来たい」と再来日にも前向きです。最新作は『日熄』で、台湾で先に刊行され、まだ大陸では出ていませんが、現在拙訳で邦訳を進めています。

最後に中国の文芸作品に対する検閲について少し。ノーベル文学賞作家の莫言、カフカ賞作家の閨連科も発禁処分を受けた経験があります。発禁、あるいは再販禁止になると、出版社が次の作品を出すのに二の足を踏む、あるいは内容に対する自主検閲が厳しくなり、作家の自由な創作の足かせになってしまいます。出版社は直接処分の対象となるため、非常に

慎重になります。禁止条項が明示、明文化されるより、どこまでが大丈夫でどこからがダメなのかということがわからないほうが、自主検閲、自己規制ではよりハードルが高くなるので、これは規制する側としては賢いやり方かもしれません。

また、これまで大陸で出版できないものも、香港の台湾の繁体字版、海外版で出版され、中国の人々も旅行やネット通販などで手に入れることができていました。大陸の簡体字版で削除、書き直しせざるを得なかった部分を、繁体字版では復活、加筆して出版するのです。しかし、2014年に習近平の招集で開催された文芸工作座談会では、文学、芸術への政府の積極的な関与が明確になりました。大陸の出版本の香港での出版にも圧力がかかるようになっていきます。中国の作家たちの立場も常にプレッシャーにさらされ、緊張感を強いられています。世界的に評価されて有名だからといって、決して自由ではありません。だからこそ、作家たちが必死になって伝えようとしていることを、中国の読者はしっかりと受け止め、共感するのです。今後の中国、ひいては日中関係を考える上で、そんな作家たちの思いに、中国の読者たちの共感に、わたしたち日本人も寄り添っていけ

たらと思います。中国人が膨大な数の日本の文学作品を読んで、さまざまな角度から日本への理解を深めているいま、わたしたち日本人も中国の小説の世界を知り、中国社会、中国人への理解を深める努力は続けていくべきではないでしょうか。翻訳という仕事がどこで誰かの、あるいはもしかしたら両国の関係にとつてごくぐくわずかでもいい方向へ向かうための力になっていると思えたら、それもまた幸せなことです。

（2017年1月26日・公開フォーラム）

講師略歴（いずみ きょうか）

東京都生まれ。1994年北京大学留学、博報堂北京事務所を経て、フリーランスに。約16年間北京で暮らす。2009年より朝日新聞GLOBE「世界の書店から」を連載中。大学非常勤講師。

訳書『水の彼方 Double Mono』（田原著、講談社）、『悲しみは逆流して河になる』（郭敬明著、講談社）、『兄弟』（余華著、文藝春秋）、『患患 日中の海を越えた愛』（文藝春秋）、『紫禁城の月』（共訳、メディア総合研究所）、『炸裂志』（河出書房新社）